

タイ・イサーン視察研修報告会の開催にあ  
たって

角田市アジアの農民と手をつなぐ会  
代表世話人 面川 義明

私達は、1990年1月アジア5カ国から農民代表を呼んで開催された「アジアモンスーン稻作農民ろばた祭り」をきっかけに、旧角田市農協青年部を中心にアジアの農民と交流を重ねてきました。

1993年には、継続的な交流・支援活動の必要性から JA青年部OBを中心に国際協力の自主運営組織として「角田市アジアの農民と手をつなぐ会」を設立し今日に至っております。

アジアの中でも特に、タイ国・イサーン地方の農民と相互理解を深め、村おこしや技術交流事業等を継続して実施しています。この間、JA青年部を中心に延べ100名以上の角田市民がイサーンの地を訪れています。

今回は、昨年4月角田女子高が宮城県の高等学校男女共学化により97年の歴史に幕を閉じたのを契機に計画されたものです。

8年前、旧角田女子高生徒会等が中心になって、イサーン地方農村婦人自立協力の一環として贈った、「足踏みミシン」の活用状況を検証することにより、アジアにおける女子教育支援事業の可能性を探るために実施したものです。

この「足踏みミシン」は、旧角女と隣町の伊具高校で40年以上前から裁縫の授業等で使用した物を償却処分する際、タイ・イサーン農村婦人の自立のために役立て欲しいということで、両校の生徒会が中心となり贈ったものです。

その「足踏みミシン」が遠く異郷の地、タイ・イサーンで現役として活躍している姿を目の当たりにしてきました。

イサーンの村に泊った夜、村のお母さん達が中心となり歓迎会が開かれました。その席上、角女OGの皆さんも「宮城県角田女子高等学校校歌」を披露。イサーンの夜に、角女の校歌が響きわたります。

日本の女学生が学んだ「足踏みミシン」。50年の時を越えた今。タイ・イサーン農村婦人の自立のために立派に働いています。イサーンの地に

流れる、ゆったりとした時間の中で、「足踏みミシン」を通した新たな人と人、絆が生まれているのだと感じたひと時でした。

ところで、東南アジアと聞くと、その言葉自体に日本人は優越感を感じるようです。

「東南アジア諸国よりも日本は全ての面で先進国だ。遅れている東南アジア諸国に支援してあげる。それが 日本の役割・・・」。

今回参加した角田女子OGの皆さんも、少なからずそう思っていたと言います。今もって、多くの日本人の潜在意識として残っているのも現実でしょう。

かつてタイ国で最も貧しいといわれた、タイ・イサーン地方。その村の子供達が時代の流れに遅れまいと必死に生きようとする姿に接し、「支援する国・日本から支援される国・日本へ」そんな近未来の日本の姿を予感したのは私一人ではなかったでしょう。

今日、世界的規模で急激に席巻しようとしているグローバルリズム戦略の中で、生まれ育った「角田」で如何に生き続けるのか。

タイ・イサーンの人々との15年以上に亘る交流の歩みは、15年前アジアモンスーン祭りで掲げた「自立と共生」の実現に向けた、小さな実践の歴史だといえます。その中で見えてきた事は、人と人の絆を大切にする社会。多様な価値観を共有する地域社会づくりが、これから目指す方向のひとつではないか。

「支援」から「協力・連帯」へ。いまこそ行動が求められている時代なのだと実感した旅でした。

最後に、タイ・イサーン視察研修を企画するにあたりご協力をいただき、常に事務局として、私達の活動を支えていただいておりますJAみやぎ仙南、JICA東北支部、角田市そして、小松先生に心から感謝を申し上げます。

今後とも、ご支援とご指導をお願いいたします。

## 参加者の感想

### 佐々木 香代子

2006年の1月3日～7日にかけて、インドシナ半島中央部に位置する国、タイ国に行ってきました。

8年前に角田女子高校と、伊具高校がタイ国イサーン地方に贈った「足踏みミシン」が契機となって、その現状調査のため研修であり、その中で異文化に触れながら、タラート村との交流をはじめとする「タイと日本の関係」について考えさせられました。

訪れたコンケーンはタイの東北部に位置する。政府主導の都市計画のもと整備されていることもあって、交通量や家電製品の利用が多く、近代的な印象を受けた。

そのような時の流れが影響してか、人々の関心は都会にあり、タラート村の人々も憧れが強いようだ。村にミシンを贈ったことによって、その傾向に拍車をかけてしまった部分もあるが、それでも尚、人々の村に対する愛着心は強く驚かされた。

タイ人は親切だと感じた。仏教の教えによる慈

悲救済の精神からか「温厚な性格で、愛想が良い」と言われる理由にもうなずける。人々の温かさやコミュニケーションの高さにも驚かされた。地域間や人と人とのつながりが密であり、対人関係が希薄化している日本人が学ぶ部分が多いのではないか。

タイと日本の関係を考えた時に、「支援する」、「支援される」という一方的なものではなく、相互理解をはじめとする相互発展が必要だと感じた。

日本人の、タイやアジアに対する間違った知識、理解も問題であると思う。この研修を通して、自分の持つイメージと実状が異なる事に気付いた。それと共に、自分の知識不足を不甲斐なく思った。今回は、タイの現状を見ることしかできなかったが、これを機に国際的な視野を広めていきたいと思う。そして、相互理解を出発点として、日本とアジアの関係を考えていきたい。（ささき・かよこ 宮城大学事業構想学部学生）

### 栗和田 沙紀

角田女子高は、県の男女共学化の流れに伴って2005年4月角田高校と統合され、昨年3月私は、角田女子高最後の卒業生の一人である。

母校、生徒会役員の先輩方が中心となって贈った「足踏みミシン」が、今どのような状況にあるのか、タイに見に行かないかという話が来た。

高校時代は生徒会役員として、生徒会活動の運営に携わっていたので、興味もあり行くことを決意した。

実際に贈った足踏みミシンは、タイ・イサーン地方にあるタラート村などで活用されていた。

今回訪問したタラート村では、ミシンが来たおかげで村の人々の生活が変化し、以前は低賃金で重労働をして稼がなければならなかったのが、今ではそのようなことをしなくても良くなったと言っていた。タイにミシンを贈るという活動が、タイの人達の生活をも変えてしまうということに、驚きと共に先輩達の活動のすばらしさを現地に行ってみて実感した。

このプロジェクトで、国際協力の輪が広がり、今回行ったことでまたその輪が広げられたことに嬉しく思った。

この事実を多くの人達に広げ、益々国際協力の輪を広げていきたいと思う。また、協力し合うには「支援」という形ではなく、タイも日本もお互いに手を結び合って、共に成長していくのが望ましいと感じ、お互い何をすることが望ましいのか模索できればと思う。

今回、タイに行き多くのことを学び吸収出来たが、それはこのプロジェクト実現のために協力いただいた、角田市アジアの農民と手をつなぐ会・JAみやぎ仙南・JICA東北及び、小松先生・石丸さんなど多くの方々のおかげである。感謝したいと思う。

ありがとうございました。（くりわだ・さき 宮城教育大学 学校教育教員養成課程 学校教育専攻学生）

## 古積 恭子

2005年4月、角田女子高は県内高等学校再編計画により、97年の歴史を閉じ、角田高等学校と統合し、男女共学校としてスタートを切った。

角女建学の精神、「女子にも教育を」は達成され男女平等教育が実現した。しかし、アジア諸国の教育事情は貧しく、特に女子の教育が遅れているとの事。この機会にアジアにも建学の精神を発信し、「角女」と云う名の教育の拠点作りをしてはどうか。と、同窓生有志で話し合った。創立90年に角女は、廃棄処分しようとした「足踏みミシン」を修理・復活させてタイ東北部の村々に贈っていた。

伊具高校も同時に贈り、合計50台であった。これを実施したのは、「角田市アジアの農民と手をつなぐ会」のメンバーであった。

当時角女生徒会も、募金活動を行い資金作りに協力した。15年前からタイとの交流を続けていた会なので、先ず交流があったタイに実情を調べようと、JAに会の事務局担当者を訪ね、角女の話をした。ここから「タイに贈った足踏みミシンを訪ねる旅」が、始まったのである。

この会の代表をはじめ、会員の方々、事務局、渡邊宗雄先生。多忙な方々であったが、一致協力されたから本日を迎えることが出来たと思う。

参加した角女同窓生4人（10代2人・40代

1人・70代1人）、会員女性1人（20代）。年代に開きがあったので視点も異なっていたと思うし、将来性もあるので大変良かったと思う。日本において得た情報とはいさか違っていた。私の感じ方の相違もあると思うが、「百聞は一見にしかず」である。

地方都市コンケン市は人々が多く集まり、大小の車の騒音で充満した中、ムアイ女史の店には各地から集めた女性たちの作品が商品として豊富に陳列されていた。

タラート村で初めてミシンに出会ったし、印象深い民泊をした。ノンドゥ村のミシン工房には工業用ミシンも置いてあり発展的だ。ウェンノイ営農センターは、物置小屋になっていた。村の小学校までついでに視察した。制服姿の児童は礼儀正しく、人なつっこく愛らしかった。タイは、王政の下発展しつつあるが、あの自然との共生は残してほしい。

今後の交流は、現地N G Oのムアイ女子と仲間たちとの連携であると思う。私たちも交流を更に続けていきたいと思う。

最後に、現地で合流した小松先生・通訳をしていただいた、石丸さんのご苦労に感謝したい。（こづみ・きょうこ 元宮城県角田女子高等学校同窓会 最終の同窓会長）

## 毒島 弘美

去る1月3日～7日まで、角田から贈った足踏みミシンのその後を知るため、タイ・イサーン地方へ行ってきた。

今回は、子育てが終わりつつある母の立場での感想を書くことにする。

タイは季節的には、冬とはいえ日中の気温は30度以上となり、日本との気温差に体がついて行けず熱中症気味になりながらの旅となった。

コンケン到着後、すぐに現地で農村女性の自立活動の中心となっているムアイさんに会い、活動の概要を聞いた後ショップを見学。店内にはミシンを使った製品を始め、村の伝統工芸品が数多く並べられていて、彼女の活動の成果を見ることが出来た。その後、ミシンを実際に使って製品を作っているタラート村へ向かい、村での女性達の生

活の様子を見せてもらった。

村での女性達は母系家族ということもあってか、よく働きしっかり家庭を守っている印象を受けた。行く前に聞いていた女性の立場とはだいぶ違っていて、いろんな面で現状をよく知る必要があると思った。

現在、彼女の店に製品を提供している人々は、以前のように乾期に重労働・低賃金での出稼ぎに行くことなく、家庭を守りながら現金収入を得ることが出来るようになり、裕福ではないにしろ安定した生活が出来ているようだ。ただ、子ども達の教育に関しては義務教育が中学校までと充実してきてはいるものの、もっと上の教育を受けさせたいと思えば、日本同様にお金が必要となり、悩みの種となっているようだ。

また、これまで地域の結びつきが強くお互い

に助け合いながら子育ても含めて生活してきたが、最近若い人達の目が外の世界に向いていて、時代の波に乗りたいと中央へ出て行くケースが増え、その結果村に残る人が減り、あげくに隣人との関わりをも拒む、変に都会化した状況が村の中で起こりつつあり事もわかった。

今回の訪問で、角田から贈られたミシンをきっかけに村の女性達の生活が代わったことを知った中で、今後私達はどのようにお付き合いしていくべきいいのかを考えると、先ずは現状をよく知り十分理解した上で長く続けられる、無理のないお手伝いをしていくのがベストだと考えた。私個人の考えとしては、彼女達が少しでも多くの現金を手にすることが出来るお手伝いが、出来ればと思っ

ている。

最後に、印象に残った言葉がある。それは「足を知る」というもので、急速な発展の中で目先の欲望だけに向かっている国民に対し、タイ国王の言葉だ。この言葉を聞いたときはっとした。私自身も時代の波に流され、物にあふれた生活をし、常に欲望を持ち、立ち止まって足元を見る時間がほとんど無かったことに気づき、“目から鱗が落ちる”といった感じだ。

これからは、彼女達と関わり合いを持ち、何かお手伝いをと偉そうなことを考える前に、先ずは自分自身を見直すことから始めたいと思う。（ぶすじま・ひろみ 元宮城県角田女子高等学校卒業生）

### 鈴木 忠則

イサーンを訪れてから十数年、角田女子高・伊具校のミシンを贈ってから9年。ムアイさんが我が家にホームステイしてから7年。タイ・イサーンは、何ともいえない思いのある土地である。

初めて訪れたときの独特的な気候風土、臭い食べ物の何れも私の体や嗜好に合う。また、機会があれば再び訪れてみたいと思っていた。日頃は仕事や雑用で時間・時計を気にしながらの毎日。そんな時、今回のミシンが活躍している現状視察と交流の話を聞き参加を希望した。

2006年1月3日朝、12月30日の夜に積もった雪が残り、凍てつく寒さの残る角田を出発し、数時間後、気温30度以上のムッとするような暑さと湿度。でもそれは息苦しいとかでなく、懐かしいような体が解かれるような感じの別世界に来たと思った。

翌日は、ムアイさんがヨチヨチ歩きの次男を連れてコンケン空港まで迎えに来てくれた。コンケンはバンコクより湿度も低く、より過ごしやすい。彼女のショップに立ち寄りこれまでの経緯やNGOの活動等を聞きながら店内を見せてもらう。なかなか立派な店で、若い客も多く彼女も頑張っている印象をより強くした。

時間が少ない旅だが、充実し、それでいて時間が、ゆったりと流れている。

タラート村に向かう途中、乾期独特の景色が広がりを見せ、村が近づくにつれ見覚えのある家並みが見るにつれ、十数年前記憶が少しづつよみがえってくるのを感じた。

村に着きお母さん達の出迎えは、遠くから来た親戚のように暖かみを感じるものだった。村を見たり聞きながら、贈ったミシンが本当に村の役に立っていること嬉しく思った。

ムアイさんが、当時6歳の長男を置き、一人で日本に来て、数ヶ月一生懸命勉強していったことが、今財産となりイサーンの村々と共に共同体として生かされている。それこそが、私達アジアの農民と手をつなぐ会の目指したものではないだろうか。今度の交流も私にとっては掛け買いのない旅となった。そんなすばらしい自然や村の人達に、何か恩返しが出来ないだろうか。村を外から変えるのではなく、村の自然を生かしながら村の人々が暮らしていく道がないものだろうか、そして少しでも手助けが出来ればいいなと思っている。

（すずき・ただのり 当会 会員）

## 泉 織江

「生まれ育った故郷を愛すること」・・・。まさにそれは、現在の日本社会が過去のどこかに置き忘れてきたものではないだろうか。

私は、タラート村で出逢った人々の原点がここにあると感じた。村全体がまるでひとつの家族のよう生活している光景が今でも忘れられない。そして、「足踏みミシン」がタラート村の人々の手によって再び息づいていること、人々の「愛郷心」に触れ、強く胸を打たれたのである。

異国之地から客観的に日本を見つめることで学ぶことは多い。そのうちの一つが「愛郷心」である。そもそも「愛郷心」が生まれる過程には、

その土台となる地域のつながりや人々の結束力が備わっていることが不可欠である。それを再考することによって、角田、ひいては日本全体に満ち溢れていた「愛郷心」を呼び戻すことができるのではないかと思った。

そして今この時、角田とタラート村の心の架け橋となっている「足踏みミシン」を思うと、胸が熱くなるのである。これからも互いの文化や価値観を受け入れ、支え合える関係を構築し、共に前進していきたい。(いづみ・おりえ 当会会員 角田市立北角田中学校 講師)



ミシンを使って仕事をする村の女性



機を織るチャンおばさん



バンコクの王宮



タラート村のお寺で朝食